



「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～ 第6回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「UからOへ、中日大卒者の就職戦線」

山東省 王鋸嘉

春の終わりにになると、初夏の日差しが重なり合った新緑に降り注ぎ始める。まだ世間を知らない、やる気充分の若者達がスーツケースを引く姿を目にし、寮の階下からは持って行くことはできない物売ろうとする不慣れた呼び込みの音が絶え間なく耳に届いてくる。…3年間ずっと似たような光景を経験している私は、卒業の季節なんだなと感じた。それから、こうした光景の主役である彼らも、間もなく不安を感じて彷徨わざるを得なくなる。2012年に卒業し、就職と…

ある日、学年の就職指導委員から学生全員に1つの情報をもたらされた。「2010年4月29日付け中央の組織部からの通達によると、5年間で10万名の大卒者を村役場幹部に採用というところを、5年間で20万名というように変更。」それを聞いただけで、若い私達の頬はみな興奮で赤く染まった。実際、私のクラスでは、学友は皆な“大卒の村役場幹部”という仕事をとても素晴らしいものだと思っていた。休暇中に周辺の郷や鎮へ行って、実験村支部の書記の補佐実習をすることも珍しくなかったのである。1990年代中頃から江蘇省で試験を開始し、今日では全国で全面的な試験を実施するに至っている。元々“三農”問題の解決を意図した“大卒の村役場幹部”であったが、予想外の収穫があった。

黒板では、卒業生の夕べの開催時刻に関する告知が人目を引いていた。教科書をめくると、ちょうど日本の“Uターン現象”を紹介するページが目にとまった。これを見ていて、私は思わず物思いに耽った。

いわゆる“Uターン現象”とは、日本で1970年代から現れた現象で、都市の労働力が地方へ帰るといふものである。経済の高度な成長により、環境問題と大都市の人口の“過密化”がもたらされ、大都市の卒業生の一部は故郷に帰って起業することを選択したのである。日本人教師の話では、以前、この現象と相反する地方人口の“過疎化”の影響を受け、村役場(中国の村民委員会に相当)、農協、商工会のような地方にある職場は、当時の新卒者の間で飛ぶ鳥も落とす程の勢いで引っ張りだこになった。地方には自然豊かな環境があり、仕事は安定していて快適で、人々も人情があつて素朴で、地方に戻って勤めればマイホームを考えることもできる…そうした全てが、日本の大卒者にUターン就職ブームを起こす強力な理由となったのだ。

地方の環境が日本の若者をここまで強く引きつけたのは、何故なのだろうか？ 根源に遡り、とことん追求して、私は発見した。日本は太平洋西岸に位置する島国で、6800余りの島から構成され、全国の68%が山地であるため、海と隣り合い山を友としてきた歴史の営みにより、日本文化は“生存”の哲学と自然の映像との結晶体になったのである。言い換えれば、日本文化の形成は、日本独自の自然環境によって培われた風土や人情と切り離すことはできないということである。日本人が常に口にする“大自然と親しむ”とは、彼らが一生をかけて完遂する課題なのである。結局、これは実は“自然至上”的思想の一種とすることができる。

日本とは違い、中国は文明があまりに古く、五千年もの人類史が中国文化の各側面に浸透しきっている。中国人が大自然という母の懷を離れてから余りに長い時間が経過したため、私達の心に気づかぬうちに輝くばかりの“人類至上”的思想が育ったと言えるのかもしれない。古今を見渡してみると、私達は人類社会の構築をより重視し、改革開放以降の高度な経済発展により、多くの若者達が社会発展の潮流に駆り立てられた。若者は旅行鞆を背負って、相対的に立ち後れた貧しい農村を次々と離れ、先進的で繁華な都市に馳せ参じたり、大学の卒業後もそのまま都市部に残ったりした。自らの手で故郷の熱い土に触れる機会はとても少なかったのである。そのため、中国では、“孔雀が東南へ向かう”、“西の人材が東へ”といった就職の傾向が今なお明白なのである。

“大卒の村役場幹部”が大学卒業生の就職に新たな風、新しい選択肢を提供したことは、喜ぶに値する。専門的に調査・研究したことがある学友から聞いた話では、政府が打ち出した各種の優遇政策、農村の優れた自然環境、快適な人文環境、大都市の就職戦線の厳しさ、どれもが一部の大卒者を農村へ戻らせる主な要素となっているのだという。“大卒の村役場幹部”現象だけでなく、多くの大学生が新しい道を切り開き始めており、希望就業先を中小都市と広大な農村へと転向したり、郷里に帰って創業したり、科学技術を農業に活用したりいる。例えば、『福州晩報』には、福建省永安市小陶鎮の大学生・馮壯波は高給の職場を辞め、新婚の妻を連れて帰郷し野菜農家に転身したという記事が載り、広く社会の注目を集めたことがある。

寮に帰ってYahoo!Japanで調べてみると、驚いたことに“Uターン現象”と似通ったものが他にも何種類か見つかった。日本の大学卒業者は、大都市で卒業後、故郷近くの中小都市へ戻ったり、自分の故郷ではない街に移住したりして就職することもある。この二つの現象は、地図上でそれぞれアルファベットの“J”や“I”を描くため、“Jターン現象”、“Iターン現象”と呼ばれる。

日本の大卒者が、“U”から“J”、そして、“I”へと地域移動を転換させてきたのは、まさに日本人の“大自然に親しむ”という課題の最も良い解釈なのである。実際、私が望んでいるのは、遠くない将来、中国に“Oターン現象”が現れることである。私達みんなが両手で一つ一つの小さな“O”を作り、地球という大きな“O”との調和を実現するのだ。